

著者のアンラシネ(根づけ)の試み

私たちは、この世に生まれて、気がついてみると、ことばにあふれた世界を生きていく。ことばは、私たちにどって空気のようになり前、ことばのない世界など、思い描くことすら難しい。しかし、その私たちが、生まれてから少なくとも最初の一年は、ことばを話すことも、ことばを聞いて理解することもなかったはずだ。人は、このことばにあふれた世界に、まずは「ことば以前の」状態で生み出され、しばらくはその「ことば以前の」状態のまま生きる。ただ、その頃のことを私たちは憶えていない。気がついたときには、私たちはみな、もうことばの世界のただなかにいたのである。それゆえ、誰もがことばが生まれてくる過程を自らたどってきてもおきながら、それがどのようなものであったかを、ほんとうの意識では知らない。

ことばの発生については、どのようにして人類がことばを獲得したのかを問う言語起源論が、系統発生の問題として古くから議論的になってきた。しかし、子どもの個性発生(つまり発達)については、ことばがどのようにして生まれてくるかを、親たちがそのままの前で体験している、あまりに当たり前に見えるためだろうか、これをもう一つの謎として取り上げて、その根本から考えてみようとする人が、じつは、なかなか見つからない。子どもの言語発達を身近に観察して、その過程を克明に記録する人はいても、そこに根の深い謎を見える人は少ないのである。しかし、目の前に見えてしまうからこそ、逆に見失ってしまうことがある。それは、ルビンの杯を前景に取り出して見せしませば、その背景にひそんでいる人の横顔を見失ってしまうのに似ている。

すでにことばを持ってしまっている私たちは、ことばとはこういうものだというある固定観念に囚われていて、そこから簡単には逃れられない。たとえば、この世に生まれたとき、子どもの周りにはすでに「ことば」が飛び交い、その「ことば」を子どもは聞き、学び、やがてそれを自分のものとして獲得するのだと考えてしまう。しかし、よく考えてみれば、「ことば以前」の子どもにとりて、それはまだ「ことば」ではなく、「声」である。その声がことばになっていくのであって、既存のものとしてある「ことば」をただ学習し獲得するのではない。ことばは、「獲得する」ものではなく、言ってみれば子どもを囲む声のやりとりのなかから、文字通り「生まれてくる」。

『ことばの前のことば』を語るやまだは、この「生まれてくる」ものとしてのことばに付き添い、その謎に迫ろうとしている。やまだによれば、子どもは「多数の声たちが響き合い生き交いざわめき合う「声の森」のようなところに生まれ」、最初の数ヶ月、母と子は、声を交わし合い、共鳴しながら、ともに「うたう」関係を生きる。そして、この初期の二人関係のコミュニケーションこそは、すでに「あの種の完成体といつてよい」ほどのもの。ところが、子どもは、時を経るにつれ、この完璧なコミュニケーションを手離し、「声の森」から身を引き離し、そうしてやがてその声たちを具体化し個性化した「自分の声」を発するようになる。これがことばの生まれていく過程なのだ、やまだは言う。

一般には、子どもはことばを獲得してはじめて、人と通じあう手段を手に入れ、社会的存在になっていくかのよう

に思われている。しかし、ことばという新しいコミュニケーションの世界への参入は、一方で、たがいに共鳴し融け合っていた「うたう」コミュニケーション」からの離脱でもある。やまだのこうした思想は、私たちの文化のなかでけっして特異なものではないのだが、指さしや三項関係、あるいは静観対象の発生や延滞模倣など、子どもの具体的な観察に基づいてその過程を徹底して追い、これを鮮やかに描き出した点では、やまだの仕事は他に類を見ない。

「やまだようこ著作集」の第1巻となるこの本は、同名の処女作(一九八七年刊)を中心に、その前後に発表したいくつかの論文を配した大著である。やまだ自身、そのあとがきのなかで、処女作にはその人のすべてがあると言われたりするが、「今になって振り返ってみると、本当にそうかもしれない」と書いている。そう思っ、その処女作のあとがきをあらためて見てみると、やまだは、そこでさらに二十年ほど前の自らの思奮期を振り返って、それは「私にとりて、「ことば」が意味を喪失するという怖ろしい時期であった」という。文学を志したはずのやまだが、結局は、心理学に向かい、こうした著書に残す出発点、このデラシネ(根つき)の体験にあったとすれば、その後のやまだの仕事はそこに並行して行われたアンラシネ(根づけ)の試みなのかもしれない。

ことばは「獲得する」ものではなく、文字通り「生まれてくる」

子どもの具体的な観察によって、ことばへの過程を描き出す

浜田寿美男



共鳴し、共感し、響きあう「並ぶ」関係からおのずと「ことば」は生まれる—— 著者の原点を生きた著作(ことばの前のことば)と、その後の関係の発展(うたうコミュニケーション)を、一冊に集結。新耀社

(奈良女子大学名誉教授)